

[特集]フィンテックの進展とその将来像…⑧

フィンテック雑考

—金融とITの融合の将来像—

株式会社日本政策投資銀行 設備投資研究所 所長 大石 英生

金融と技術の関係を思い返すと、80年代から90年代にかけ、制御工学の応用やパソコンの普及により、資産運用や金融商品取引の高度化を支える「金融工学」が注目された。この「金融工学」は、リスクとリターンの関係を理論化し、金融機関の課題であったリスク管理の高度化に貢献があった。しかし、その後は投資銀行の業務の拡大のため、原債権が抱えるリスクや商品市場の流動性に比べ、過度に証券化された商品が市場に出回ることとなり、その後の世界金融危機へと向かうことになった。今回の「フィンテック」は、金融とIT（情報技術）の融合である。インターネット、モバイルやソーシャルメディアの担い手である米国のスタートアップのIT企業が仕掛け人となり始まった。海外では、従来の金融業界へ、この種のIT企業が浸食することによる顧客の奪い合いも報道されているが、日本では、基本的に金融機関とIT企業の良好な関係のもとに融合が進んでいるようだ。かつての「金融工学」が金融機関そのものの問題として始まったのに対し、膨大なITの利用者やITを利用する企業を巻き込む「フィンテック」は、そのスタート時より、世間の注目度は明らかに大きいものとなっている。このように「フィンテック」は、金融におけるITを通じた「デジタル化」という社会・経済現象とも言えよう。ところで、この「デジタル化」というのは何を意味し、今後どのように展開するのだろうか。

フィンテックにおける「デジタル化」とは？

そもそも「デジタル化」とは、モバイル等のデジタル機器を活用して、社会・経済活動の様々な情報のやりとりが、双方向で拡大することである。対象となる情報が、工場等のサプライチェーン間でやりとりされる場合はIoTであり、金融に関連する場合は「フィンテック」である。「デジタル化」とは何かを考える前に、まずはデジタル技術の特徴を確認してみよう。一点目は、アナログ信号からデジタル信号への変換により、誤差のない完全な伝達を可能としたこと。二点目には、誤差のない完全な伝達により、その伝達の繰り返しによる制限の無い伝達の複製を可能としたこと。そして最後の三点目は、同じ情報インフラのプラットフォームで実施される限り、無制限な伝達の複製が、限界費用がほとんどかからないで実施可能となったことである。従来から、銀行のオンライン化等、金融はIT化を通じて自動化や効率化を行ってきたが、そこでは、一点目と二点目の特徴が活かされた「デジタル化」であった。一方、今回の「フィンテック」の潮流における「デジタル化」は、三点目の特徴を活かし、金融の種々のサービスがITのプラットフォームで急速に拡大・進展し、それに伴い金融サービスの内容そのものに変化が起こったことに特徴がある。例えば、キャッシュレス決済は、「デジタル化」のもとでは以下のように解釈できる。そもそも当事者間の貸借関係を精算するために、通貨がその都度交換されてきたのだが、この貸借関係を連

続いて情報化する（情報として記録する）ことが、無制限に繰り返すことが出来れば、決済というサービスにおいて、理論上、通貨は要らなくなる。現時点では、個々の貸借関係を正確かつ網羅的に情報化するところが不十分ではあるが、仮に正確かつ網羅的に情報化出来れば、通貨を用いない真のキャッシュレス決済が可能となる（まさに今話題である仮想通貨とブロックチェーンのことである。）。そして、決済だけでなく、保険等その他の金融サービスにおいても、そのサービスの本質をデジタルな情報として取り出し、新しいサービスの連鎖に組み替えていくことが可能となる。今回の「フィンテック」における「デジタル化」の革新的なポイントはまさにこの点である。

フィンテックは金融業を乗り越えることができるのか？

「デジタル化」が金融をどのように変革するのかを考えてきたが、次に、金融業界の持つ旧来の体質が、「フィンテック」の展開に及ぼす影響を考えてみたい。近時、IT覇者のプラットフォームによるデータの囲い込みを問題視する議論が目につく。検索エンジン等を無料で提供する代わりに、いろいろなデータを無料で自らのものとして囲い込む。新規参入の障害になりはしないか、また、無償のデータを利用した分析は、データの質、ひいては分析の質に問題がないのか、といった批判である。「データ資本主義」という造語には、ブルジョアジーが労働を囲い込むように、強力なプラットフォームがデータを抱え込むことで、「金融資本主義」と同じ陥穽に陥っているのではないか、といった批判的なニュアンスが込められていることを感じる。金融業界は、もともと情報の獲得とその活用がビジネスの生命線であり、また、守秘義務という文字通りその業界マナーが徹底していることから、情報やデータを囲い込む傾向が強いと思わ

れる。強力なプラットフォームのデータの囲い込みが、金融業界のもつ保守的な体質のもとで増幅されたら、経済のイノベーションの担い手としての「フィンテック」の展開にはマイナスとなるだろう。少し前の米国の新聞に、「ビッグネームのプラットフォームが、信用力で得た低利の資金で、他社のハイイールドな社債への投資を積極化している。まさに大銀行の再来」、というコラムが掲載されていた。これはたまたまの偶然なのか。

フィンテックの可能性は？

現在の金融業界は、政府のような中央の存在が管理する通貨制度の基で信用を取引している。これに対して、「フィンテック」で中心的な技術である「ブロックチェーン」は、「通貨は、今後も通貨として利用されると期待されることで取引が可能となる。」という自己撞着な特性を背景に、中央の管理に依存しない、新しい通貨を創設するために開発された技術である。暗号等の技術的先進性だけでなく、この脱中央集権的なところに、心情的にも魅力を感じている者も多いことだろう。本稿でも、「フィンテック」が、金融サービスの本質を純化し（アンバンドリング）、新たなサービスの連鎖を生むという（バンドリング）、その未来志向の面を評価するとともに、従来の金融業界というフィールドから抜け出せず、発展の壁にあたってしまう不安にも触れた。そもそも「フィンテック」を金融業界という既成の概念のもとで考えること自体が間違いなのかもしれないが、ブロックチェーンが中央銀行を中心とする金融システムに、一足飛びに取って代わることも、なかなか想像できない。このように「フィンテック」の将来像を現時点で十分とらえるのは難しい。もっとも、そのことが「フィンテック」への大いなる期待が存在しうるといふことなのかもしれない。